

RISK Japan 2018

ERM態勢の展望テーマに議論

保険の伝統的な仕組みを乗り越える時代に

リスク管理の専門家が一堂に会し、最近の国際規制の動向、日本の金融業界への影響、多岐にわたるリスクを管理するための革新的なソリューションなどについて議論する「RISK Japan 2018」が6月6日、東京都千代田区のシャングリ・ラホテル東京で開催された。保険パネルディスカッションでは、「変わりゆくビジネスモデルと環境におけるERM態勢の展望」をテーマに、RGAリインシュアランス・カンパニー日本支店の渡邊靖久執行役員CFO、SOMPOホールディングスの高橋幸嗣リスク管理部長、アクサ生命の山口暁統合リスク管理部長が意見交換した。モデレーターはトーマツ・リスク管理戦略センターの後藤茂之ディレクターが務めた。以下にその内容を紹介する。

リスク管理は終わりのない旅

ESG投資を最  
適な形に導く

後藤 われわれを取り巻く環境を見ると、新しい

状況下、気候変動、サイバーセキュリティなどのエマージングリスクについて、どのように捉えているか。

高橋 損保会社の業績のブレに最も大きく影響するのは通常、自然災害であり、これは既にリスクとして認識しているが、気候変動で頻度やインパクトが大きくなれば、損保会社の業績のブレが大きくなるという点で、気候変動をエマージングリスクとして捉えている。ERMの観点から、料率や、被害を予想するモデルを調整して適応していくことが、損保会社としての社会的責任を持統的に果たしていくために求められる。

山口 生保会社にとって、気候変動はESG投資の観点から、社会にアピールする一つの機会として考えることができる。しかし、社会に本当に有益なビジネスを展開している企業を探すと、難しい。今後、社会により大きなインパクトとソリューションを提示する企業を探すためには、ローバルな調査力と資産運用力が求められる。一方で、われわれは、保有するポートフォリオの銘柄を選定するESG投資の基準づくりに積極的に参加する必要がある。

渡邊 再保険に関して、ロックチェーンは非常に大きな期待を寄せられている。ロックチェーン取引のメリットは透明性が増すことにある。透明性が高まったときに、保険料や保険商品の設計はどうあるべきかについて、関心を持って議論している。ブロックチェーン技術が普及したときに、再保険会社がプラットフォームフォーメーション的に顧客を支え、グローバルな消費者を支えていくビジネスモデルが理想かもしれない。



(左から) 後藤氏、高橋氏、山口氏、渡邊氏

高橋 損保会社の業績のブレに最も大きく影響するのは通常、自然災害であり、これは既にリスクとして認識しているが、気候変動で頻度やインパクトが大きくなれば、損保会社の業績のブレが大きくなるという点で、気候変動をエマージングリスクとして捉えている。ERMの観点から、料率や、被害を予想するモデルを調整して適応していくことが、損保会社としての社会的責任を持統的に果たしていくために求められる。

山口 生保会社にとって、気候変動はESG投資の観点から、社会にアピールする一つの機会として考えることができる。しかし、社会に本当に有益なビジネスを展開している企業を探すと、難しい。今後、社会により大きなインパクトとソリューションを提示する企業を探すためには、ローバルな調査力と資産運用力が求められる。一方で、われわれは、保有するポートフォリオの銘柄を選定するESG投資の基準づくりに積極的に参加する必要がある。

後藤 各パネリストの話から伺っていると、さまざまな局面でマインドセットの転換が求められる。サイバーリスクは「今日は大丈夫だが、明日は分からない」というリスクであり、リスク担当者にとって対応が難しいものである。サイバー攻撃を受けたときに対処するクライシスマネジメントの訓練、攻撃後の対応としてのリスク管理を強化しなければならない。

渡邊 再保険に関して、ロックチェーンは非常に大きな期待を寄せられている。ロックチェーン取引のメリットは透明性が増すことにある。透明性が高まったときに、保険料や保険商品の設計はどうあるべきかについて、関心を持って議論している。ブロックチェーン技術が普及したときに、再保険会社がプラットフォームフォーメーション的に顧客を支え、グローバルな消費者を支えていくビジネスモデルが理想かもしれない。



デジタル革命がもたらす課題などを話し合った

高橋 ESG投資の観点では望ましくないかもしれないが、火力発電所に対しては、損害保険の社会的責任という観点から保険の備えを提供する必要がある。真のマインドセットの転換にはエネルギー政策の変更など一定のブレークスルーが必要である。サイバーリスクに対しては従来、防御することを考えてきたが、防御は不可能であり、サイバー攻撃を受けるときの対応を重視するようマインドセットが変化している。

山口 アクサグループは経済価値ベースのソリューションの適用を受けている。しかし、レビューセッションリスクなどの社会的リスクは経済価値で捉えることができない。こうしたリスクをどのように表現し、危機感として経営陣に伝えるのか。

業界内外から知見を得るリスク管理の高度化を

後藤 保険業界に変化をもたらしているデジタル革命にはオポチュニティとリスクの両面がある。オポチュニティについては、ビジネスモデルを変革して、さらなる成長を促すことが可能になる。一方、リスクとしては、サイバーの脅威が増大していくことなどが考えられる。こうした中で、保険業界が進むべき方向性をどのように考えるか。

マインドセットの転換が求められる

高橋 エマージングリスクは形を捉えにくく、肝要だと考えている。

サイバーリスクは「今日は大丈夫だが、明日は分からない」というリスク

山口 リスク管理には終わりがなく、社内、保険業界だけでなく、さまざまな企業、業界の方々と意見交換し、知見を得ることでリスク管理の高度化を図りたい。

損保会社にとってサイバーリスクとは、損保会社がサイバー攻撃で被害を受ける、保険契約者が攻撃を受けたときに保険金を支払うという二つの意味がある。また、サイバー保険以外の保険契約でも、サイバー攻撃で契約者に損害が発生したときに保険金を支払うケースが起り得る。そのような集積に対しては、再保険でリスクを移転することなどでコントロールする必要がある。

渡邊 元受保険会社から引き受けさせていたことが再保険会社の収益源だ。このため日々の業務において、全従業員が個別案件をリスク・リターンを通して考え抜く習慣を身に付けていくことが肝要だと考えている。